

第9回「泉大津市オリアム随筆賞」

【オリアム随筆賞（最優秀賞）】

どんぐりコロコロ

梅田純子・新潟県三条市

二〇〇一年二月、私はがんセンターの奥にひっそりと佇む角砂糖のような部屋の前に立っていた。ドアには黒いスモークガラスがはめ込まれていて、中は見えない。上方には、「化学療法室」と書かれた翡翠色の表示灯がほのかに光っている。

深く息を吸い、悲壮な決意で一歩前に進み出ると、自動ドアがスーッと開いた。そこは存外に明るかった。

白い壁と白い天井に守られたその部屋には、二十床ほどのベッドが整然と並んでいて、ベッドとベッドの間は薄紅色のカーテンで仕切られていた。

看護師に促され、その一つに横たわってドクターを待っていると、「初めてですか？」隣のベッドからカーテン越しに若い女性の声がした。

「ええ、そうです」緊張しながら答えた。

「そんなに緊張しなくても大丈夫ですよ」と言いながら少しだけカーテンを開けて透けるような白い顔をのぞかせたその女性は、思いのほか若く、高校生くらいにしか見えない。手編みの若草色の帽子がよく似合っている。

「帽子、可愛いわね」と私が言うと、その女の子は「ありがとう。抜け毛隠しには見えないでしょう。患者だっておしゃれをしなくちゃね」と笑って言った。

何気ないその言葉に私はハツとした。（そうだ。ここにいる人たちはみな、抗がん剤で髪が抜け落ちているのだ。そして私ももうすぐ……）

「好きな色はありますか？」女の子はベッド脇に置いてあった布のトートバッグを手に取り、こちらに掲げながら聞いてきた。

「もしよければ、編んで差し上げますよ」

私はバッグの中にぎっしり詰まっている毛糸玉の中から、オレンジ色の一玉を選んで彼女に手渡した。

「元氣が出る色ですね」そう言うと早速、彼女は編み針を取り出して編み始めた。

「この帽子ね、『どんぐり帽』って言うんですって。私も初めてこの化学療法室に来た時、先輩の患者さんに編んでいたんです」おしゃべりしながらも彼女の手先は、クルクルとリズムカルに動いている。

「私ね、自分の髪が抜け落ちるなんて想像もしてなくて……。抗がん剤治療が始まってしばらくしたある日、鏡の前で髪を梳かしていたら、櫛にごっそりと髪が絡まって、本当にびっくりしました。何が何だか分からなくなって、もう一度、櫛で梳かしてみると、今

度はもつと沢山抜け落ちて、まるで全部の毛根が一瞬にして溶けてなくなってしまうたよううで……。抗がん剤には色々な副作用があるけれど、私にはそのどれよりも髪が抜け落ちるのが辛かった。でもその日、惨めな気持ちでここに来た時、あの患者さんが私にこの『どんぐり帽』をプレゼントしてくれたんです。嬉しかったなあ」

その人はこの部屋に新人が入ってくる度に、「好きな色は？」と聞いてはどんぐり帽を編んでいたのだそう。そのため治療室の中では「どんぐりさん」と呼ばれていたらしい。そして、どんぐりさんが全ての治療を終えた日、女の子は編み針と毛糸玉の入ったトートバッグを引き継いだのだという。

二週間後、私がまた点滴のために化学療法室に来ると、その子はすでにベッドに座って編み物をしていたが、私をみつけると、点滴の管が繋がっていない方の手を大きく振って合図を送ってきた。

「はい、どうぞ」と手渡された紙袋の中にはオレンジ色のどんぐり帽が入っていた。

私は早速それを被り、女の子の隣のベッドに横になった。髪の毛の抜け落ちた二人が、色違いのお揃いの帽子を被り並んで点滴を受ける様子は、健常者から見たら不思議な光景だろうが、私たちは幸せだった。どんぐり帽は頭だけでなく心も温めてくれたのだ。

やがて私も女の子からどんぐり帽の編み方を習い、編み針と毛糸玉の入ったトートバッグと共に、大切な任務を引き継ぐことになった。三代目どんぐりさんの襲名である。

病気になってからは何でも人からしてもらえばかりで、社会から取り残されているような後ろ向きな気持ちになっていた私は、こうして誰かの役に立てることが嬉しかった。

あれから二十年が過ぎた今でも、底なしの辛さから救い出してくれた女の子と彼女のどんぐり帽のことを思い出さない日はない。

あのトートバッグは今、誰の手元にあるのだろうか。きっと、どんぐりのようにコロコロと患者たちの間を転がりながら、生きる勇気を与え続けているに違いない。